「ぜ」の言語学

秋　月　高太郎*

The phonology, syntax and pragmatics of the final particle *ze*

Kotaro Akizuki

現代日本語（共通語）における終助詞「ぜ」の特性について、音韻論、統語論、語用論の視点から明らかにする。「ぜ」には、上昇調のイントネーションを伴うものと非上昇調のイントネーションを伴うものがある。また、「ぜ」は、「よ」や「ね」と共通した生起環境に生じるが、付加可能性には異なりがある。このような付加可能性の相違は「ぜ」がもつ内在的意味に帰することができる。「ぜ」には、自分が有する知識や意向のあり方を、想定される聞き手の知識や意向のあり方との照合を行わずに表出することを示すという機能があり、「ぜ」の「強い主張を表す」「断定的に強調する」といった表現効果は、この内在的意味から導かれる。

キーワード：「ぜ」、終助詞、イントネーション、上昇調、表現効果

1．はじめに

日本語は、その文末にさまざまな単語を付加することが可能である。以下の（1）の文には、それぞれ、「ね」「よ」が付加されている。

（1）　a．雨だね。
　　b．雨だよ。

「ね」「よ」は、伝統的には、終助詞と呼ばれている。終助詞は、もっぱら、話し手の心的態度（モダリティ）に関わる語彙形式であり、付加される文が表す事態的な意味には関与しない。（1）の２つの文は「雨が降っている」または「雨が降ってきた」という事態的な意味を表す点においては違いがないが、（1a）は、話し手が聞き手も雨が降っていることを知っていると想定したときに、（1b）は、話し手が聞き手が雨が降っていることを知らないと想定したときに用いられるという違いがある。

「ね」「よ」の他にも、日本語にはさまざまな終助詞がある。以下の（2）の文には、それぞれ、「ぜ」「ぞ」「わ」が付加されている。

2013年９月９日受理
*尚絅学院大学　教授

（2） a．雨だぜ／ぞ。
b．雨だわ。

「ぜ」「ぞ」が付加された（2a）の文は、話し手が、聞き手に雨が降ってきたことを強く知らせる意図が感じられる。一方、「わ」が付加された（2b）の文は、話し手が、雨が降ることを望んでいない状況で、雨が降ってきたことを嘆いている気持ちが感じられる。このことは、「ぜ」「ぞ」「わ」も、「ね」「よ」と同様に、話し手の心的態度に関わる語彙形式であることを示している。

「ぜ」「ぞ」「わ」は、話し手の心的態度を表すことに加え、聞き手に特定のイメージを想起させることがある。（2）の発話を聞いた日本語母語話者の多くは、（2a）は男性の発話者によるものであり、（2b）は女性の発話者によるものであるという印象を受けるであろう。「ぜ」「ぞ」は「男ことば」であり、「わ」は「女ことば」であるという分析は、これらの終助詞が用いられた文が聞き手に与える印象に基づいたものとみなせる。これは、終助詞が話し手の心的態度を表すモダリティ表現であることに加え、聞き手に特定のイメージや印象を想起させやすい語彙形式でもあることを示している。

これまで、日本語の終助詞については、数多くの研究がなされてきた。しかし、そこで扱われてきた終助詞にはかなり偏りがあるのが実情であると思う。（1）で示した「ね」や「よ」については、さまざまな視点からなされた多くの先行研究が存在するのに対し、（2）で示した「ぜ」「ぞ」「わ」については、「男ことば」と「女ことば」といった使用者属性の視点からの研究はあるものの、「ね」や「よ」に対して行われているような、多様な視点からの研究の蓄積は未だない。そこで本稿では、共時的な視点から、現代日本語の共通語における終助詞「ぜ」の用法に焦点を当て、その特性を明らかにすることを試みる[1)]。すでに、秋月（2013）では、役割語研究の視点から、「ぜ」が「ヤンキー」キャラクターによって用いられる〈ヤンキー語〉の1つとして用いられることを指摘した。たとえば、以下の（3）はすべて、日本のマンガ作品や特撮作品に登場する「ヤンキー」キャラクターによる発話である。

（3） a．行くぜ！　ヒロシ（BE-BAP-HIGHSCHOOL）
b．早く行こうぜ（ろくでなしBLUES）
c．二万年早いぜ（ウルトラ銀河伝説外伝ウルトラマンゼロVSダークロプスゼロ）

本稿では、秋月（2013）での「ぜ」の使用に関する観察をふまえ、終助詞「ぜ」の特性を、音韻論、統語論、語用論の視点から明らかにする。第2章では、音韻論の視点から「ぜ」が伴うイントネーションについて述べる。第3章では、統語論の視点から「ぜ」の生起環境について述べる。第4章では、語用論の視点から「ぜ」の内在的意味とその表現効果について述べる。

2．「ぜ」のイントネーション

一般に、イントネーションとは、発話の際に生じるピッチの変化を指す。特に文末のイントネーションは、固有の意味とむすびつく傾向がある。以下の例を見られたい。

（4） a．雨、降ってきた⤵
b．雨、降ってきた⤴

文末が下降調のイントネーションで発話された（4b）は、話し手が雨が降ってきたことに気づいたり、聞き手に雨が降ってきたことを知らせる場合等に用いられる。一方、文末が下降調のイントネーションで発話された（4b）は、話し手が聞き手に雨が降ってきたかどうかを尋ねる場合等に用いられる。さまざまな言語において、下降調は平叙文と、上昇調は疑問文と結びつく傾向があり、日本語もその例外ではない。

イントネーションの多くが文末のピッチの変化である限りにおいて、文末に付加される終助詞は、その変化を帯びる語彙形式になる。これまでにも、終助詞「ね」や「よ」とイントネーションの関わりについては、多くの研究がなされてきた。以下の例を見られたい。

（5） a．君は行きますね⤴
b．昨日の試合勝ったね。

（5a）は、話し手が、聞き手が行くかどうかを強く確認しているニュアンスがあり、このような文における「ね」は上昇調を伴って発話されるのが普通であろう。一方、（5b）は、聞き手に共感を求めているようなニュアンスがあり、（5a）のような上昇調を伴わないで発話されるのが普通であろう。森山（2001）は、（5）のような文のペアを、それぞれ異なったイントネーションで発話したものを日本語母語話者に聞かせた結果、「明示的上昇（急な上昇）の『ネ』が確認の意味で解釈される強い傾向がある」ことを示している。この観察は、「ね」が付加された文が表す内容と、「ね」が担うイントネーションの間に制限があることを示している。すなわち、「ね」は異なったイントネーションを付与されることにより、異なった機能を発揮する可能性がある。

２．１　上昇調の「ぜ」と非上昇調の「ぜ」

「ね」に伴うイントネーションと似たような現象が、「ぜ」にも観察される。以下の例を見られたい。

（6） a.　やっぱこうなるか。いくぜ⤴
b.　正義のために戦った勇者の姿だ。おまえは立派なやつだぜ。
（ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリアル銀河帝国）

（6）はいずれも、特撮映画における同一の登場人物による発話だが、それぞれ、「ぜ」が異なったイントネーションを伴って発話されている。（6a）の「ぜ」は、明らかに上昇調（森山（2001）の言う「明示的上昇」）で発話されているのに対し、（6b）の「ぜ」は、平坦または下降調気味で発話されている。ここで明らかなのは、（6a）の「ぜ」を平坦または下降調気味で発話するときわめて不自然になるということである。以下の例においても同様のことが言える。

（7） a．おい、海だぜ⤴
b．見ろよ。あいつ、女と一緒にいるぜ⤴
c．なあ、早く行こうぜ⤴

（7）の文における「ぜ」はいずれも、「明示的上昇」を伴って発話するのが自然であろう。一方、以下の例では、（6b）と同様、「ぜ」は平坦または下降調気味で発話されるのが普通であると思われる。

（8） a. またやっちまったぜ。
b. ちくしょう、これから出かけるってときに雨だぜ。

（6a）（7）と（6b）（8）の対比は、（5a）と（5b）の対比に酷似していることは明らかである。このことは、「ね」と同様に、「ぜ」の機能はイントネーションに影響を受けることを示唆する。つまり、「ぜ」には、「明示的上昇」を伴って発話される「ぜ」と、平坦または下降調気味で発話される「ぜ」があるということである。以下、前者を上昇調の「ぜ」、後者を非上昇調の「ぜ」と呼ぶ。「ぜ」の機能については改めて第４章で述べるので、ここでは、イントネーションの視点からは２種類の「ぜ」が認められることを指摘するにとどめ、これ以上深入りしない。

２．２　スギちゃんの「ぜ」

「ぜ」とイントネーションの関係について、もう１つ注目すべきものがある。それは、お笑い芸人のスギちゃんが用いる「ぜ」である。以下は、彼の公式ブログの記事の文章である。

（9） 外にいたら、若い女の子４人写真撮ってとお願いされたので
良いよと返事したら
あの、良くある
撮る方だったんだぜぇ ^_^
でも、写真好きだから綺麗に撮ってあげたぜぇ ^_^
喜んでたぜぇ ^_^

（スギちゃんのワイルド日記）

スギちゃんは、文末に「ぜ」を付けて発話することで知られる芸人である。しかし、ブログ上では「ぜぇ」と表記されていることからもわかるように、彼が発話する「ぜ」は、「ぜ」自体が引き延ばされ、いったん下降後上昇するようなイントネーションを伴っている。通常、終助詞の「ぜ」がこのようなイントネーションを伴うことはない。スギちゃんの「ぜ」には、通常の「ぜ」にはない「感情的色彩」が強く感じられる。森山（2001）は、終助詞がもつ「感情的色彩」とイントネーションの関係について、次のように述べている。

感情的色彩は、イントネーション決定要因として最終的な調整に関わる。感情的にいわば無標の場合には無視できるが、有標の場合、すなわち、感情的意味として特別な価値

を与える場合、情報伝達的な意味に背馳するイントネーションの調整もあり得る。逆にいえば、通常のプロソディックなパタンでないということは、逆に何らかの特別な意図を表すという解釈の手がかりになると言ってもよいであろう。(p.45-7)

仮に「ぜ」の機能を「強調」とするなら、スギちゃんの「ぜ」は、そのような機能を無効化するかのように用いられている。秋月（2013）で指摘したように、「ぜ」は、その使用者の談話の中に生じるすべての文の末尾に付加されるのではなく、「強調」すべき文の末尾にだけ付加されるものである。そうでなければ、「ぜ」が付加された文が、他の文より卓立して「強調」されることにはならない。しかし、（9）で示したように、スギちゃんの談話では、ほとんどすべての文の末尾に「ぜ」が付加されている。スギちゃんの「ぜ」は、「強調」する必要のない情報にも、あえて「ぜ」を付加することで、「強調」という行為そのものを皮肉的に表現するという効果がある。「ぜ」がそのような意図で用いられるためには、「ぜ」が通常のイントネーションで発音されるのでは不十分である。そこで、「ぜぇ」という、「通常のプロソディックなパタン」とは異なったものが採用されるのだろう。このように、スギちゃんの「ぜ」は、その機能をメタレベルで利用したものと考えられるため、以下の考察の対象からは除く。

3．「ぜ」の生起環境

本章では、「ぜ」が文のどのような位置に生起し、どのような要素に付加可能かを見る。これまでの例でも示されているように、「ぜ」が生じるのは文の最後尾である。以下の例を見られたい。

（10）　a．やっぱりもう始まってるみたいだぜ（ろくでなしBLUES）
　　b．でもあの前田って奴　相当やりますぜ（同上）

（10 a）では推量の助動詞「みたいだ」の後に、（10 b）では丁寧の助動詞「ます」の後に、「ぜ」が生じている。「ぜ」は助動詞の後に生じ、以下の（11）のように、助動詞の前に生じることはできない。

（11）　a．* もう始まってるぜみたい。
　　b．* 相当やるぜます。

では、「ぜ」は文の最後尾に生じる語彙形式とみなしていいだろうか。定延（2007）は、以下のような例をあげ、キャラ助詞は、終助詞の後に生じうることを示している[2)]。

（12）　a．うそだよぴょーん。
　　b．おおっ、今日は誰かねぷーん。

（12 a）では終助詞「よ」の後にキャラ助詞「ぴょーん」が、（15 b）では終助詞「ね」の後にキャラ助詞「ぷーん」が生じている。「ぜ」が、「ね」や「よ」と同じタイプの語彙形式であ

るなら、「ぜ」の後にもキャラ助詞が生じうることを期待させる。以下の例を見られたい。

(13) a.＊行こうぴょんぜ。
b.? 行こうぜぴょん。

キャラ助詞「ぴょん」の後に「ぜ」が生じた（13 a）は容認不可能な文であるのに対し、「ぜ」の後にキャラ助詞「ぴょん」が生じた（13 b）の文は、容認度はかなり低いが、非文法的な文ではないと思われる。ただ、実際には、(13 b）のような文が用いられることはほぼないだろう。それは、「ぜ」が担う感情的色彩とキャラ助詞が担うそれが衝突するためと考えられる。「ヤンキー」の発話キャラクタを繰り出す「ぜ」と、ウサギのような小動物の発話キャラクタを繰り出す「ぴょん」が共存しにくいことは想像に難くない[3)]。しかし、(13 a）と（13 b）の容認可能性に明らかな差があることは、日本語母語話者の共通した直感であると思われる。

以上の観察が正しければ、語用論的な制約は受けるものの、「ぜ」は「よ」「ね」と同じ統語的位置に生起する語彙形式と見なすことができる。このことは、従来「ぜ」が「よ」や「ね」と同じ終助詞というカテゴリーに分類されてきたことを想起すれば、特に驚くべきことではないだろう。しかし、「ぜ」が生起可能な環境は、「ね」や「よ」とまったく同じというわけではない。以下は、「ね」「よ」がどのような動詞の活用形に付加可能かを示したものである。

(14) a. 行くね／よ。
b. 行こうね／よ。
c.＊行けね。／行けよ。
d.＊行くなね。／行くなよ。
e. 行ってよ／ね。

「よ」は動詞の終止形、勧誘形、命令形、禁止形、テ形に、「ね」は動詞の終止形、勧誘形、テ形に付加できるが、命令形や禁止形に付加することはできない。以下は、(14）と同じ環境で、「ぜ」の付加可能性を示したもである。

(15) a. 行くぜ。
b. 行こうぜ。
c.＊行けぜ。
d.＊行くなぜ。
e.＊行ってぜ。

「ぜ」は動詞の終止形や勧誘形に付加できるが、命令形、禁止形、テ形に付加することはできない。「ぜ」は、命令形や禁止形に後続できないという点では「ね」と共通した分布を示すが、テ形に後続できないという点では「ね」と異なる分布を示す。この点では、「ぜ」の生起環境は、「よ」のそれよりも「ね」のそれに似ていると言える。

文における「ぜ」の生起上の特性をまとめると、以下のようになる。

①「ぜ」は助動詞の後に生じる。
②「ぜ」はキャラ助詞の前に生じる。
③「ぜ」は終止形、勧誘形に付加できる。
④「ぜ」は命令形、禁止形に付加できない。
⑤「ぜ」はテ形に付加できない。

①と②は終助詞一般に共通する特徴である。③は「ね」「よ」と共通する特徴である。④は「ね」と共通する特徴である。⑤は「ぜ」特有の特徴である。①と②は「ぜ」がもつ統語的な特性とみなせるが、③～⑤が統語的な理由によるのか、語用論的な制限によるのかははっきりしない。第４章では、③～⑤の特性が、語用論的な制限から導かれることを示す。

４．「ぜ」の内在的意味と表現効果

本章では、語用論的な視点から、「ぜ」の内在的意味とその表現効果について述べる。筆者の知る限り、これまでにも「ぜ」の用法について断片的に述べられることはあったが、統一的な説明がなされたことはまだない。「ぜ」の用法には、以下のようなことが指摘されてきた。

①もっぱら男性の話し手によって用いられる[4)]。
②親しい間柄の会話で用いられる。
③相手を軽蔑するような気持ちを表す。
④相手の注意を引くのに用いる[5)]。
⑤断定的に強調する[6)]。
⑥強い主張を表す[7)]。

①と②は「ぜ」の使用者と使用場面には制限があることを述べている。③と④は「ぜ」を用いるときの聞き手に対する話し手の心的態度を表している。⑤と⑥は「ぜ」が付加される文が表す命題内容に対する話し手の態度を表している。これらの説明は、「ぜ」の用法を、それぞれ異なったレベルから行ったものであり、いずれも、「ぜ」がもつ本質的な意味の説明とは言いがたい。本章では、益岡（1991）にしたがい、表現形式や語彙がもつ「内在的意味」と「具体的な表現効果」を区別する立場をとる。内在的意味とは、表現形式や語彙が「本質的に有する意味」のことであり、具体的な表現効果は、内在的意味の系として導き出されるものと考える。以下では、「ぜ」がもつ内在的意味と、そこから派生する表現効果を明らかにしていく。

４．１「ぜ」の内在的意味

「ぜ」の内在的意味を明らかにするにあたって、益岡（1991）の終助詞「ね」と「よ」の分析を手がかりとしたい。益岡（1991）は、「ね」と「よ」の内在的意味の違いを、話し手が「自分が有する知識や意向のあり方」を「聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方」と照合を行ったときの判断の違いに帰属させ、「ね」と「よ」の内在的意味を、以下のように定義している。

(16) 「ね」の内在的意味：自分が有する知識や意向のあり方が、聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方と一致する方向にあると判断したことを示す。
(17) 「よ」の内在的意味：自分が有する知識や意向のあり方が、聞き手が持っていると想定される知識や意向のあり方と対立する方向にあると判断したことを示す。

これによって、以下の２つの文がもつニュアンスの違いがどのように説明されるかを見てみよう。

(18) a．行くね。
b．行くよ。

(18) は、動作動詞「行く」の終止形に「ね」「よ」が後続している形である。これらの文はいずれも、話し手自身の意志を表明した文と解釈されるが、話し手の発話態度には、それぞれ異なりがある。「ね」を用いた（18 a）には、話し手が「行く」つもりであることを、あらかじめ聞き手が了解しているという想定の下で、「行く」ことを確認するというニュアンスがあるのに対し、「よ」を用いた（18 b）には、話し手が「行く」つもりであることを、聞き手が気づいていない、または忘れているという想定の下で、話し手自身が「行く」つもりであることを聞き手にあえて伝えるというニュアンスがある。このような「ね」と「よ」の表現効果の違いは、「ね」と「よ」の内在的意味から導かれる。「ね」は、話し手と聞き手の知識や意向のあり方が一致するという話し手の判断があるときに用いられる。(18 a）は、話し手が「行く」と聞き手も思っているという話し手の判断が前提になった発話であるために、確認という表現効果が生じる。一方「よ」は、話し手と聞き手の知識や意向のあり方が対立する方向にあるという話し手の判断があるときに用いられる。(18 b）は、話し手は「行く」と思っているが聞き手はそう思っていないにちがいないという話し手の判断が前提になった発話であるために、あえて伝えるという表現効果が生じる。

さらに、(16)（17）は、(14）で見た、「よ」は命令形や禁止形に後続することができるが「ね」はできないという事実を説明できる。命令や禁止は、話し手が聞き手の意向に反して行為を強制する言語行為である。話し手は、聞き手が「行かない」と思っていると判断しているから「行け」と命令し、聞き手が「行く」と思っていると判断しているから「行くな」と禁止するのである。すなわち、命令や禁止を行うためには、話し手が、聞き手が自身の意向と反した意向をもっていると想定していることが前提である。この前提は「よ」の内在的意味（17）とは整合するが、「よ」の内在的意味（16）とは相反する。

以上、「ね」「よ」を用いた文の表現効果がその内在的意味から導き出されることを見た。これを手がかりに「ぜ」の内在的意味を考えてみよう。

(19) 行くぜ。

(19) の「ぜ」が付加された文には、聞き手がどのような想定をしているかにかかわらず、話し手が「行く」という意志を強く主張するというニュアンスがある。これは、「ぜ」の内在的意味には、「ね」や「よ」と異なり、話し手が、自身が有する聞き手の知識や意向のあり方を、

想定される聞き手の知識や意向のあり方と照合するという思考プロセスが含まれないことを示唆する。ここで、「ぜ」の内在的意味を次のように仮定してみよう。

(20)「ぜ」の内在的意味：自分が有する知識や意向のあり方を、想定される聞き手の知識や意向のあり方との照合を行わずに表出することを示す。

(20) の仮説は、(19) の文がもつニュアンスを次のように説明する。「行くね」や「行くよ」といった発話は、話し手が、聞き手の意向や知識のあり方を想定し、自身のそれとの照合を行った上で行われているのに対し、「行くぜ」という発話は、その発話が特定の聞き手に向けられていたとしても、話し手は、その聞き手の意向や知識のあり方に注意を向けずに行われている。すなわち、「ぜ」を付加することは、話し手が聞き手に注意を払っていない、さらには、聞き手を無視しているということの表示であり、これが、「強い主張」や「断定的に強調」といったニュアンスを生み出すのである。加えて、「ぜ」が付加された文は、対話の場面で発せられた場合でも、独り言として発せられたかのような印象を与えることが少なくない。事実、「ね」や「よ」が付加された文は独話で用いられることはないが、「ぜ」が付加された文は、しばしば、独話で用いられる。以下の例は、特撮映画において、登場人物が発した独り言であるが、文末に「ぜ」が付加されている。

(21) ロボットとは言え、ウルトラ兄弟とやり合うってのはけっこうきついぜ。
（ウルトラ銀河伝説外伝ウルトラマンゼロ VS ダークロプスゼロ）

「ね」や「よ」を用いるためには、話し手が想定する聞き手の意向や知識との照合が前提とされるため、聞き手が存在しない独話では使用できない。一方、(20) で仮定した「ぜ」の内在的意味は、聞き手が存在がしなくても矛盾は生じない。これが「ぜ」が独話でも使用できる理由だと考えられる。

さらに、(20) の仮説は、第３章で見た、「ぜ」が命令形、禁止形、テ形に付加できないという生起上の特性も説明することができる。すでに述べたように、命令や禁止を行うためには、話し手の意向と、自身が想定する聞き手の意向との照合が必要である。また、動詞のテ形によって依頼を行うときにも、同様の前提がある。依頼とは、話し手の意向が聞き手のそれと対立するという想定があるときに、聞き手の意向を尊重して話し手の意向を伝えるものである。たとえば、「行って（ください）」と言うのは、「行かない」と思っているであろう人に、強制はしないが「行ってほしい」という意向を伝えたいときである。したがって、「ぜ」が、聞き手の意向との照合を行わないことを示すマーキングである限りにおいて、命令形、禁止形、テ形を用いる前提とは矛盾をひきおこすことになる。

もう１つ、(20) の仮説に説明的妥当性がある事実を示しておこう。以下に示したように、「ぜ」は疑問文に付加することができない。

(22) a.＊それでも行くの（か）ぜ？
b.＊どこへ行くの（か）ぜ？

疑問とは、聞き手の知識が話し手のそれよりも上回っているという想定があるときに、聞き手に情報の提供を求めるものである。たとえば、「どこへ行くの（か）？」という疑問文は、どこへ行くかどうか自分は知らないが、知っているにちがいないと思った相手に対して用いられるのであって、知っているはずがない相手に聞くことはありえない。つまり、話し手が疑問文を発するときには、話し手が想定する聞き手の知識への照合が行われなければならないのである。このような前提は、「ぜ」の内在的意味と矛盾をひきおこす。

４．２　上昇調の「ぜ」の機能

（20）で仮定した「ぜ」の内在的意味は、「ぜ」の生起上の特性の多くを説明するが、まだ残された問題がある。それは、（15ｂ）で示した、「ぜ」が動詞の勧誘形に付加できるという事実についてである。勧誘の表現を聞き手を誘うための表現と解釈する限りにおいて、そこには聞き手の存在が前提とされているように思われる。このような前提は、（20）で仮定した「ぜ」の内在的意味と矛盾をひきおこすのではないだろうか。

「行こうぜ」のような、勧誘形に付加された「ぜ」については、注意すべき特徴がある。それは、勧誘形に付加された「ぜ」は、常に上昇調のイントネーションを伴って発話されるという特徴である。すでに見たように、上昇調の「ぜ」は、勧誘形にだけ付加されるわけではない。（6ａ）では動詞の終止形に、（7ａ）では名詞述語文に、（7ｂ）では現象描写文に、それぞれ「ぜ」が付加されている。これらの例に共通するのは、話し手が、発話時に眼前で目撃したことを、あえて聞き手に知らしめようとするニュアンスが感じられることである。また、以下の例はマンガの登場人物のセリフであるが、これらの文は上昇調の「ぜ」を伴って発話されると思われる。

（23）　ａ．応援団は解散したって聞いたぜ⤴（ろくでなしBLUES）
　　ｂ．卒業生の半数ちかくがヤー公になってるらしいぜ⤴（BE-BOP-HIGHSCHOOL）

これらの文には、話し手が過去に聞いたことや見知ったことを思い出して、あえて聞き手に知らしめるというニュアンスが感じられる。以上の観察から、上昇調の「ぜ」には、話し手の意向・認識・知識等を、話し手の発話によって、あえて聞き手に知らしめるという表現効果があると考えられる。

なぜ上昇調の「ぜ」にだけこのような表現効果があるのだろうか。本稿では、終助詞のもつ内在的意味とイントネーションの機能を切り離す立場をとる。つまり、上昇調の「ぜ」が固有の機能をもつとみなすのではなく、上昇調の「ぜ」の機能は、「ぜ」の内在的意味と、イントネーションが一般にもつ機能の和として説明できると考える。

ここで、「行こうぜ」のような勧誘形に付加された「ぜ」がなぜ上昇調のイントネーションを伴うのかという理由を考えてみよう。勧誘という言語行為は、命令や依頼と同様に、聞き手の存在を前提とする。しかし、命令・依頼と勧誘には、聞き手の意向を想定するかどうかという点において異なりがある。話し手が命令や依頼を行うときには、聞き手の意向の想定が必要であることは、すでに述べた通りである。一方、話し手が勧誘を行うときには、話し手自身がその行為を行いたいと思っているという願望があればよく、必ずしも聞き手の意向の想定は必要ではない。たとえば、話し手が聞き手が「行く」と思っていると想定しようが、「行かない」

と思っていると想定しようが、話し手自身が「行きたい」と思っているだけで「行こう」という発話は可能である。このことは、「行きたいな」のような願望の表明が勧誘の発話効果をもつことにも示されている。勧誘という言語行為は、聞き手の意向とは無関係に、話し手が自分の願望を表明することでも遂行できるのである。したがって、「ぜ」の内在的意味を（20）のように仮定する限り、勧誘形に「ぜ」が付加されても、語用論的な矛盾は生じない。ただし、勧誘が聞き手に共同行為をうながすものである以上、そこに聞き手の存在は必須である。独話で勧誘の表現が発せられることはありえない。勧誘の発話が、聞き手の意向を無視して行われるとしても、聞き手へのはたらきかけという意図がなければ、勧誘という発話行為は成立しない。そこでその機能を補完するのが、上昇調というイントネーションであると考えられる。片桐（1997）は、上昇調のイントネーションの機能を、以下のように定義している。

（24）〈上昇〉：文の表す意味の受容の正しさの判断を直接聞き手に対して要求する。

勧誘形に付加された「ぜ」が非上昇調で発話されれば、（24）の機能を担うことはない。それは、勧誘の表現でありながら聞き手へのはたらきかけを含まない発話ということになり、語用論的な矛盾をひきおこす。これが、勧誘形に付加された「ぜ」が上昇調のイントネーションを伴わなければならない理由だと考えられる。

以上の説明は、平叙文に上昇調の「ぜ」が付加された文がもつニュアンスにもあてはまる。すでに見たように、平叙文に付加された上昇調の「ぜ」には、話し手の意向・認識・知識等を、話し手の発話によってあえて聞き手に知らしめるという表現効果がある。このような表現効果は、「ぜ」の内在的意味と、上昇調のイントネーションがもつ機能の和の結果として導かれる。（20）で仮定した「ぜ」の内在的意味から、「強い主張」や「断定的に強調」といったニュアンスが生まれる。これに上昇調のイントネーションが与えられることによって、「強く主張」または「断定的に強調」された内容の正しさの判断を、聞き手に要求する機能が加わる。こうして、平叙文に上昇調の「ぜ」が付加されると、あえて聞き手に知らしめるというニュアンスが生まれるのである。

４．３　「ぜ」の表現効果

「ぜ」の内在的意味を（20）のように仮定することで、「ぜ」の生起上の特性の多くが、語用論的な適格性・不適格性の結果として説明できることを見た。以下では、「ぜ」がもつ内在的意味が、語用論的にどのような意味をもち、それがどのような表現効果を生み出すのかについて述べる。

（20）で仮定した「ぜ」の内在的意味には、「自分が有する知識や意向のあり方を、想定される聞き手の知識や意向のあり方との照合を行わずに」というネガティブな規定が含まれている。この部分はなぜ必要なのだろうか。田窪・金水（1996）の談話管理理論にしたがえば、話し手は、対話において、聞き手の心的状態を常にモニターしながら発話を行っている。聞き手は何を知っていて、何を知らないのか、また知っていることに対してどの程度の確信をもっているかなどを、話し手は推定しながら対話を進めていくのである。日本語において、そのモニター機能を担うのが、さまざまな終助詞やイントネーションである。つまり、対話において話し手は、聞き手の知識や意向のあり方をモニターして、自分が有する知識や意向のあり方との照合

を行いながら進めることが無標であり、あえてそれを行わないのは有標とみなされる。「ぜ」は、そのような有標な発話を行うことのマーカーとして機能していると考えられる。以下の例を見られたい。

(25) a. 俺が行く。
b. 俺が行くぜ。

(25) のような文が対話で用いられたとしよう。この場合、終助詞が付加されていない (25 a) の文は「行く」の部分が強勢を伴って発話されなければならない。もし、平坦なイントネーションで発話されれば、それはきわめて不自然なものになるだろう。強勢は、語用論的には、聞き手の注意を向ける焦点化の機能を果たす。つまり、強勢が与えられることによって、話し手が聞き手の知識や意向のあり方をモニターしていることが示されるのである。一方、「ぜ」が付加された (25 b) の文では、「ぜ」がその役割を果たしている。この場合、「ぜ」にことさら特別なイントネーションが付与される必要はない。モニターが行われているということは、「ぜ」という語彙的な形式が付加されていることで示されているからだ。

(20) のような内在的意味をもつ「ぜ」が対話において使用されると、ある特定の表現効果を生み出す。「ぜ」は、話し手が、想定された聞き手の意向や知識との照合を行わないという内在的意味のため、その発話内容が実際の聞き手の意向や知識と一致しない場合には、聞き手に対して、聞き手を無視した、自分勝手な発話のような印象を与える可能性が高い。これが、聞き手に「断定的に強調」したり、「強い主張」を表すという印象を与え、さらには「相手を軽蔑するような気持ちを表す」という表現効果につながる。

また、日本語母語話者の女性の話し手は、男性の話し手に比べて、聞き手に配慮した発話を行う傾向があることがしばしば指摘されている。たとえば、鈴木 (1997) は、女性の話し手は、主張や断定のような「話し手が決定権を持つ」発話を使用することができないと述べている。この観察が正しければ、「ぜ」の内在的意味である、想定された聞き手の意向や知識との照合を行わないという機能は、女性に「ぜ」の使用をためらわせるものとして働くことが予測される。これが、「もっぱら男性の話し手によって用いられる」という、使用者のジェンダー差となって表れるのだと考えられる。

しかし、男性の話し手であっても、年長の相手やフォーマルな場面においては、聞き手への配慮を欠いた発話はためらわれるであろう。その結果、男性の話し手であっても、「ぜ」を使用するのは「親しい間柄の会話」に限定されることになる。そのような親しい間柄の会話では、「自分勝手な」発話が、親しさの演出につながることがある。この意味で、「ぜ」の付いた文を発話することは、仲間意識を高める効果をもつことになる。いわゆる「ヤンキー」と呼ばれる人々が、仲間関係を重視することはよく知られている。「ぜ」が〈ヤンキー語〉の1つとして用いられるのは、このような表現効果のためと考えられる。

なお、「相手の注意を引くのに用いる」という表現効果は、上昇調の「ぜ」にのみ生じる表現効果であろう。ただし、「相手の注意を引く」という表現効果は、「ぜ」の内在的意味だけから生じるのではない。そのような表現効果は、話し手が、想定された聞き手の意向や知識との照合を行わないという「ぜ」の内在的意味と、聞き手に情報の正しさの判断を要求するという上昇調のイントネーションの機能の和として生じるものである。

５．おわりに

本稿では、現代日本語の共通語における「ぜ」の内在的意味を、自分が有する知識や意向のあり方を想定される聞き手の知識や意向のあり方との照合を行わずに表出することを示すと仮定することによって、「ぜ」の生起上の分布特性や、「ぜ」の使用上の表現効果を説明できることを示した。しかし、本稿で扱った共通語の「ぜ」と、注１で示したような、その地域バリエーションとの関係や、『浮世風呂』にある「べやぼだぜ」のような用例に現れる「ぜ」との通時的な関係については、今後の課題である。

注）

１）日本各地には、共通語の「ぜ」のバリエーションと思われる終助詞が存在する。佐藤（2002）には、「じ」（長野）、「じょ」（徳島）、「ど」（宮崎・鹿児島）等があげられている。また、田中（2011）であげられている、龍馬語の「笑うたらいかんぜよ」の「ぜよ」も役割語的なバリエーションの１つとみなせる可能性がある。しかし、これらの終助詞が、共通語の「ぜ」とどのような関係にあるのか、また用法に相違があるのか等については明らかでない。
２）秋月（2012b）では、キャラ助詞の中には、終助詞の前に生じうる「キャラ終助詞」があることを指摘したが、この観察は、終助詞の後に生じるキャラ助詞の存在を否定するものではない。
３）「ヤンキー」キャラクターと「うさぎ」キャラクターの共存は不可能というわけではない。たとえば、「ヤンキーうさぎ」という動物キャラクター（たとえば、サングラスをかけ、リーゼント頭をしたうさぎ）を想定すれば、（13b）の容認度は上がると思われる。
４）益岡・田窪（1994）、金水（2010）、『新潮現代国語辞典第１版』（1985）などに同様の記述がある。
５）②～④は『新潮現代国語辞典第１版』（1985）の記述に基づく。
６）『現代例解国語辞典第１版』（1985）の記述に基づく。
７）益岡・田窪（1994）の記述に基づく。

資料

DVD『ウルトラマンゼロ THE MOVIE 超決戦！ベリアル銀河帝国』バンダイビジュアル株式会社
DVD『ウルトラマンゼロ外伝 キラー ザ ビートスター STAGE Ⅰ 鋼鉄の宇宙』バンダイビジュアル株式会社
きうちかずひろ『BE-BOP-HIGHSCHOOL ①』講談社
森田まさのり『ろくでなし BLUES ①』集英社
「スギちゃんのワイルド日記」http://ameblo.jp/072100/

参考文献

秋月高太郎（2012a）「ウルトラマンの言語学」『尚絅学院大学紀要』第 63 号 p.17-30
秋月高太郎（2012b）「動物キャラクターの言語学」『尚絅学院大学紀要』第 64 号 p.43-57
秋月高太郎（2013）「続・ウルトラマンの言語学」『尚絅学院大学紀要』第 65 号 p.29-42
遠藤織枝（2002）「男性のことばの文末」現代日本語研究会（編）『男性のことば・職場編』ひつじ書房
片桐恭弘（1997）「終助詞とイントネーション」音声文法研究会（編）『文法と音声』くろしお出版
定延利之（2007）「キャラ助詞が現れる環境」金水敏（編）『役割語研究の地平』くろしお出版
佐藤亮一（監修）（2002）『お国ことばを知る　方言の地図帳』小学館
杉藤美代子（2001）「終助詞「ね」の意味・機能とイントネーション」音声文法研究会（編）『文法と音声Ⅲ』くろしお出版
鈴木睦（1997）「女性語の本質－丁寧さ、発話行為の視点から－」井出祥子（編）『女性語の世界』明治書院
田窪行則・金水敏（1996）「対話と共有知識－談話管理理論の立場から」『月刊言語』25-1, p.30-39
田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代－ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店

陳一吟（2013）『日本語におけるジェンダー表現－大学生の使用実態および意識を中心に－』花書院
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志・田窪行則（1994）『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお出版
メイナード・K・泉子（2009）『ていうか、やっぱり日本語だよね。』大修館書店
森山拓郎（2001）「終助詞「ね」のイントネーション－修正イントネーション制約の試み－」音声文法研究会（編）『文法と音声Ⅲ』くろしお出版
渡辺和幸（1994）『英語イントネーション論』研究社出版